純粋をめぐる闘い

――安倍能成と野上彌生子――

高　田　里惠子

1. 尊敬と軽侮

漱石が門下生たちを自宅に集めてさまざまな文芸談義や文学批評を楽しんだという「木曜会」に自分も参加してみたかったと野上彌生子（1885～1985）は後年，振りかえっている。しかし当時の状況ではそこに女性が加わることは不可能だったわけで，早くから漱石のもとに通っていた夫の野上豊一郎（1883～1950）から「木曜会」のようすをあれこれ聞くのを楽しみにしていた。それを彌生子は日記に詳しく書きとってもいたが，関東大震災で失われてしまったという。残っていれば近代日本文学史の重要な資料となっていたろうと彌生子は言いそえる[1)]。

もっとも，「木曜会」のメンバーにはなれなかったとはいえ，彌生子は漱石が『ホトトギス』に推薦してくれたおかげで比較的スムースに作家デビューを果たし，のちには岩波茂雄の出版社にも大いに世話になった。漱石門下生たち，なかでも豊一郎の第一高等学校時代の友人たちと親しく付きあってもいた。

たいへん愉快なのは（あえて愉快と言ってみるが），彌生子が彼らをそ

キーワード：大正教養主義，旧制第一高等学校，日記と文学，岩波文化，中勘助

の学問や芸術における才能の程度によって堂々と差別していたことである。才能ある男性にたいする尊敬，そしてそうでない男性にたいする軽侮。こうした軽侮については面と向かって態度にあらわしたわけではなく，岩波書店の全集版で19巻にも及ぶ日記のなかでの話である。日記は死後に公開されたが，何しろあと2か月で100歳というところで亡くなった彌生子より生きのびることができた漱石門下がいようはずもない。

夫の豊一郎の才能に関しては早くから「アキラメた」と書いている。「私は兄さん〔彌生子は子ども三人を産んだあとも夫を「兄さん」と呼ぶことも多かった〕が〔法政大学の〕予科長なんてなってもうれしくもなんともない。それよりも本統の学者として世上に活歩ママする人になって貰いたかった」（1923年の手帖断片）[2)]。

この記述からもわかるように，彌生子は男の地位や財産，世間的評価などにとらわれていたわけではない。自分の目で見た純粋な才能が問題なのだ。もちろん，そのほうがよほど残酷であろうが。彌生子自身が1971年に文化勲章を受章したおりには，体調不良を理由にして授賞式の出席を断っている。そんな世間的栄誉のようなものはどうだってよい。あるいは，やや左の立ち位置と見られていた彌生子が天皇（昭和天皇）から勲章を受けるかどうか取り沙汰されるのも鬱陶しいではないか[3)]。

彌生子がとりわけ憧れもし尊敬もしたのは，漱石の一番弟子であった寺田寅彦（1878～1935）である。豊一郎が一高生の時，偶然寅彦と同じ下宿に居たのだという。寅彦が漱石の五高時代の教え子だったとは当時はまだ知らなかった。明治女学校の生徒で，よく「兄さん」の下宿を訪れていた彌生子は，優秀な物理学者で「しかし同時に芸術家らしい教養と趣味にゆたかで，俳句をつくり，油絵を描き，時時はヴァイオリンの音さえ部屋から漏れる」寺田寅彦を崇めていた。「この世の中で一番えらいのは学者と芸術家だと何故ともなく半分子供ごころに信じこんでいたので――といっ

て自分でものを書こうなんてその頃はまだ夢にも考えていなかったのであるが――それを兼ねていた寺田さんは一層えらい人に思われた」[4)]。

そして軽侮のほうの代表格が副題に挙げた安倍能成（1883 ～ 1966）である。事実，能成にはまとまった学問的業績はない。彌生子の安倍能成追悼文によれば，豊一郎の帝大在学中に結婚した若い二人の新婚家庭を，能成は趣味の謡の練習のためにしばしば訪ねていたらしい[5)]。能成は豊一郎の一高時代の同級生であった。

安倍能成は 1909（明治 42）年に東京帝国大学文科大学哲学科を卒業したあと，正規の教職には就かず（というか，就けず），漱石の後ろ盾もあって朝日新聞や『ホトトギス』などを舞台に文芸評論家としてそこそこに活躍していた。1913（大正 2）年には，これまでの論考をまとめた『予の世界』を出版する。その翌年に阿部次郎（1883 ～ 1959）の『三太郎の日記』。1918 年には，「鵠沼の松林と砂丘との間に送りしさまざまの日の思出にこの書を阿部次郎安倍能成両君に献ず」[6)] と巻頭に書かれた和辻哲郎（1889 ～ 1960）の『偶像再興』が，まだ創業期にあった岩波書店から出る。ここに大正教養主義の要素がすべて出揃った。

紅野敏郎が「安倍の『予の世界』の位置は，阿部次郎の『三太郎の日記』に該当するものであろう」[7)] と言っているように，あるいは竹内洋が，和辻の『偶像再興』は刊行当時は「『三太郎の日記』の文体と構成を模倣していると見られやすかった」[8)] と指摘しているように，この三冊はたしかに雰囲気が似ている。そして，エッセイ（のようなもの），日記（のようなもの），書簡（のようなもの），あるいは小説（のようなもの）が並べられている，当時としては斬新な内容と構成をもつこれらの本とともに，大正教養主義が誕生したわけである。現在では能成の『予の世界』だけが読者や研究者をほとんどもたず，文化史的意義を失ってしまったように見える。

短かった大正時代の終わりとともに，インテリ界におけるマルクス主義の席巻によって大正教養主義も終焉を迎えたと見るのが一般的なのだが，ここでは，若々しくも自由な書き手だったこの三人が次々と帝国大学に就職していったところにその最期を見てみたい。阿部が1923（大正12）年に東北へ，和辻が1925年に京都へ，そして安倍が，大正最後の年にあたる1926年3月に京城へ赴任する。

安倍と和辻はその前に数年だけ法政大学教授を務めていた。1909年に法政大学（といっても当時はまだ正式な大学ではなかったが）の講師となっていた野上豊一郎が，1918（大正7）年の大学令を受けて私立大学に昇格した法政大学の教育の拡充を，とりわけ文学・哲学系の充実をはかるために，内田百閒（1889～1971）や森田草平（1881～1949）などの小説家も含む漱石門下の友人たちを次々と法政に呼び寄せたのである。フリーの書き手であった彼らに，ある程度の生活の安定が与えられたことになる。

ところが，帝国大学から声がかかったらその恩も忘れて安倍能成は法政大学をさっさと捨てようとしている，と野上彌生子の眼には映ったらしい。次に引用する日記の文中の「ヘル・A」（ドイツ語のHerrは英語のMr.にあたる）は安倍を指すが，同じころに京都帝国大学から招聘話をもちこまれた和辻のほうは帝国大学の自分勝手な傲慢さを批判していると聞いて，和辻の心意気を彌生子は褒めている。「ヘル・Aが朝鮮に新設される大学に行くことになったよし，いまさらなぜそんなところに行くのか分からない[ママ]年俸四千円で，それで一年半洋行させるよし，〔阿部〕次郎や小宮〔豊隆〕さんも行ったので，それはきっと行き度いのだとおもう――彼はそれには余り興味がないと云うそうだけれども――法政では兄さんのあとになるし，それが一寸といつの事やら分らぬというので意が動いたとおもう。〔中略〕私学のものが官学のものから一寸とよい条件で誘われるとすぐに日頃の言葉なんぞはふみにじってへいへいして行く態度を大に〔和辻が〕フ

ンガイしたよし，その意気が和辻さんにあろうとは思わなかった。ひどく見上げる」（1924 年 3 月 11 日）[9]。

しかし結局，和辻も京都に行く決心をする。「父さん〔豊一郎〕が学校から帰っての話に，和辻さんがまた京都の方へ気が動いて法政の方はまだ確定しないと云う。あの人が迷うのは能成よりは可能性がある。無理はないのである。しかしこれ等の例に依って見ても日本の学者と云うものが如何に事大主義であるかが分かる。尤も[ママ]進んだ思想を有しているべき筈の人々さえ，何より有りがたいのはお上の力なのである」（3 月 22 日）[10]。

和辻が能成と違って迷うのも仕方がないと彌生子が言っているのは，和辻には，帝国大学なんかに縛られずに自由に活動する思想家としてやって行かれるだけの「本統の」才能があるという意味であろう。

彌生子の判定はなかなか厳しいが，当たっていないわけではない。10 年後の 1935 年 8 月 26 日の日記には，「安倍さんなどはラヂオで哲学の通俗的な講演をさせるのにもっとも適任者であろう」[11] などとあるが，その通りというほかない。

安倍は 1940 年に朝鮮半島から戻り，母校一高の校長になるが，戦時中のリベラルな名校長ぶりが買われたのか，1946 年 1 月に幣原内閣の文部大臣（5 月に辞任）になり，その後も次々と政府関係の要職に就き，10 月に学習院院長に就任，1966 年の死去まで実に 20 年間その職にあった。つまり，明仁皇太子の教育掛も含めてさまざまな世間的栄誉に恵まれた。1958 年には，功成り名遂げた，しかし俗物的老人として，『週刊新潮』に自伝を連載しはじめる。彌生子の感想はこうである。「はじめて週間[ママ]新潮の彼の「戦後の自伝」なるものをよむ。予期したごとく，つまらない，特色も生彩もない粗い書き方である。いまの地位にいて立派な自伝が書ける筈はない」（1959 年 2 月 11 日）[12]。少し前の日記には，「今日「週刊新潮」に安倍さんが自叙伝をのせる広告がでている。先般からの様子できっとなにかそん

な事とは考えたが，まさか週刊新潮とは考えなかった」とある（1958年9月15日）[13]。かつての漱石門下が「まさか週刊新潮とは」！

2. 鈍感という才能

老年期の安倍能成と野上彌生子は異性の親友同士，ケンカするほど仲のよい友だちと周りからは見なされていたらしい。彌生子自身も，「私とアンバイ〔安倍〕の角づきあいは，一種社交的な挿話になった形だ」（1954年3月22日）[14] と言っている。しかし彼らの関係はそう単純に牧歌的なものではなく，先取りして明かしておくなら，彼らのその「角づきあい」のなかに，彼らがその代表格と見なされる大正教養主義と呼ばれるものの一つの特徴を見いだそうとするのが本稿の趣旨となる。

死後に公表された彌生子の日記の記述のなかで，みなを最も驚かせたのは，若い彌生子の初恋の人があの『銀の匙』の中勘助（1885～1965）であり，人妻としても長いあいだ中のことを想いつづけてきたということである。二番目は，豊一郎の死後，60代も後半になって，やはり妻を亡くしていた，京都学派の重鎮田辺元（1885～1963）と相思相愛の仲になっていたことである。この老いらくの恋のほうはひとまず措いておくとして，中勘助への失恋譚に注目しよう。ただし，彌生子研究ではこれは人気のテーマであり，すでにやり尽くされた観があるのだが，ここでひとつ，安倍能成の側から描いた図を，しかも喜劇的な図を再構成してみたいのである。

彌生子が詳しくは語ってないので正確な経緯は不明なのだが，おおよそ次のように推測されている。1906（明治39）年の夏に二人の故郷の大分で仮祝言をあげた豊一郎と彌生子は東京で一緒に暮らしはじめた。なぜか兄妹と称していたその新婚家庭を，能成と中勘助が謡の練習のためによく訪れていた。一高の同級生だった三人とも，まだ帝大に在学中。そして1909（明治42）年あたりのどこかの時点で，人妻たる彌生子が中勘助に告白を

し，中勘助が拒絶したというわけなのだが[15]，その拒絶の言葉を彌生子に伝えたのが能成だった。それで，能成の亡くなった1966年6月7日の彌生子の日記にはこうある。「安倍さんとのかんけいは，もし自叙伝を書くとすれば一つの大事な役割を果した登場人物となるわけだ。私が勝手な事を彼だけには語っていたのも，なにをや隠さんという気もちからであったが，しかし彼にはそこまでは分らなかったらしい。「毎日新聞」より夕刊の為に追悼の文をデンワで依頼され，通話器のまえで話す。しかしそんな秘密まで話されしないから，通りいっぺんのものになってしまう」[16]。

この話自体は，（もし彌生子と勘助が結びついていれば）彼らの師である漱石の『門』（1910）と似たところをもつだろう。ところが，これを喜劇に変えてしまうのが彌生子の思い込みの強さであった。あとで触れるが，要するに，中勘助も能成も，彌生子の半生を苦しめたというこの告白騒ぎをほとんど覚えていなかった，あるいは気に留めていなかったようなのである。彌生子も最後の最後になって，「そこまでは分らなかったらしい」と言っているのだが。

整った容貌の中勘助は女性に好かれたらしいが，富岡多恵子の『中勘助の恋』に描かれているように，早くに亡くなった一高時代の友人（能成の親友でもあった江木定男）の幼い娘を熱愛し，また当代一の美人と謳われたその母（亡友の妻）にも求愛されている。何より，病気で倒れた兄の妻との，つまり漱石風に言えば「嫂」との愛情あふれる信頼関係というのが中勘助の伝記の中心を占めることはよく知られているだろう。

こうした家庭の事情もあって，中勘助は一時期精神的に変調を来たし，また50代の半ば過ぎまで独身だったのだが，彌生子は自分の「告白」の所為なのではないかと思っていた。「しかし中氏が不幸だという事はよい気もちがしない。ことに彼が友だちなどに対して，ひどくヒガンだ考え方をして，世間をせばめているらしいことは，私には胸が痛い。少くともそ

の一半の責はわたしにもあるかもしれないのだから」(1935年3月16日)[17]。

しかし富岡多恵子は「彌生子の片思いによる思いすごしだろう。勘助は一度も彌生子の「愛の告白」については書いていない」[18] とバッサリ切っている。岩橋邦枝はさらに残酷で，中勘助の周りにいた女性たちに彌生子なんか「かないっこない」のだと言う。「自惚れた独りぎめを自省するふうもない。この自分本位の思い込みの根強さは，迷わず挫けず小説を書き続けた彼女の持続力とつながるものがある」[19]。女性作家たちの眼はなかなか厳しいようである。岩橋は，彌生子が小説家にしては「まともな常識人」であり，「狂気も神経衰弱もまったく無縁な健康優良児」で，「鈍感」であるとさえ言うが[20]，これは安倍能成にもあてはまるだろう。ただし岩橋は（また筆者も）このありようを否定的に見ているわけではない。

中勘助に戻ろう。1950年2月に野上豊一郎が67歳で急死したあと（妻はこれを「解放」[21] と呼ぶのだが），彌生子は40年ぶりに初恋の人との再会を果たす。彌生子の日記に拠れば，告白事件のあと夫は妻が中勘助と接触するのを許さなかったらしい。自由になった未亡人は1951年9月には北軽井沢の山荘に中夫婦を招待する。中夫人が風呂に入っているあいだ，彌生子は思い切ってあのことにも触れてみた。「彼はまたあの時安倍などに漏らさなくとも，自分でいえばすむことを，若かったから下手なことしてあなたにすまなかった，といったので，いやそれによって安倍さんは私の友だちに今もなっているのだ，と私は答えた」（1951年9月12日）[22]。

こうした中勘助との再会を知らせる長い手紙を，彌生子は1952年の新年に能成へ送る，いや送らずにはいられない。「しかし日記に書いておけばすむことを，何故あなたにだけこんな事をしらせる必要があるでしょう。とにかく告悔僧というものをもつ事は望ましいことです。且つあなたはこの問題に就いては唯一の資格のある方ですから。奥さんにもお知らせ下さい。ただこの手紙だけは便所でよんだり，落とし紙にしたりはしないでく

ださい」[23] と彌生子にしては珍しくユーモアでもって締めくくっているが，もちろん例の思い込みも書いている。「根本的に申せば，私はあの人のことはほんとうはなんにも知らず，一つの幻影を彼という人に拵えていただけです。同時に私はあの人に対する深い感謝とともに，激しい謝罪のこころを持っていました。あの方が何か一生日かげで生きているような生活におちたのは，わたしの告白が一つの原因になったのではないか，とそれはいう事です」[24]。

この書簡にたいする安倍能成の返信を，日本史研究者の青木一平が 2019 年 7 月に古書市にて入手したそうである。その一部を，〔中略〕と旧仮名遣いもそのままにして孫引きさせていただく。「私はあのことも久しく忘れてゐましたが，お手紙ニよって記憶をたどると，あのことが分つて野上が怒つた時，あなたは中の方が誘惑した（さういふ詞でハなかったが）といふ風にいはれ，私がそれを中にいつたら（中とは絶交するといふ伝言をたのまれて）中はあなたの方から求めたといふ意味のことを一寸いつて詞を濁した記憶があります〔中略〕若い時に恋をし過をすることを誰人が咎め得ましよう，わたしはむしろ自分では勝手なことをしながら，あなたを責めた野上の無反省な態度を批難するけれども，それも人間としてハ深く咎められません，たゞ一言したいのは，中があゝして独身を続けたのは断じてあなたのせゐでなかつたといふことです，〔中略〕中が結婚しなかったのはこの姉の為です，決してあなたの為でハない，これハ私が断じます，実際この二人の愛には世にも稀な悲恋とその超脱がありました」[25]。

この能成からの返信を受けとったことが日記にも書かれているが，なぜか能成の最も伝えたかったことは伝わっていない。「安倍氏より長い返事来る。中さんと義姉とのかんけいなど書いてよこした。その事を安倍さんが新聞に書いたとて中さんが怒って，それで今日まで絶交している由，中さんは一時狂的になり，自分の主観を客観的なものとして人とも衝突した

らしい。しかし恭子さん〔安倍の妻〕は中さんが好きで，今も書物などは彼女の名で送って来るとのこと。安倍さんはそれでもなお友愛をもっており，旧交を暖め度い気持ち切なるものがあると書いている。もし私が仲介者となってもとの親しみが取り返せたら，うれしい事だと思う。とにかく私がこうした男友達との交わりをもっていられるのは，日本社会には珍しい事だろう」(1952年1月6日)[26]。

告白事件の真相と時系列は彌生子研究者に任せるしかないとして，能成の返信から伝わってくるのは，彼があまり告白事件を気にしていなかったこと（能成は中からの拒絶の伝言ではなく，夫が事件を知ってしまった時の伝言を思いだしている），それと彌生子の思い込み，あるいは思い上がりにかなり慌てていることである。そして，ここで最も注目したいのは，能成が彌生子の恋の純情を，その過ちを含めた人間味を評価していることである。というのは，能成の彌生子批判の中心はこうした純情の，心の美しさの欠如にあるからである。

3. 婦人公論事件

彌生子が誇らしく語る「こうした男友達との交わり」は夫の存命中にはかなわなかった。彌生子を彌生子たらしめる大作『迷路』や『秀吉と利休』も夫の死後に完成している。安倍能成が日記のなかで俄然，重要な人物として台頭してくるのも，豊一郎亡き後の1950年以降である[27]。能成が秘密を分けもった友人であるという話も，夫の生きているあいだの日記には出てこない。

しかし，先取りして言っておけば，1950年代の後半になってくると，徐々に能成への，かなり本気の批判が増えてくる。すでに述べたように，彼らの交わりの中心にあるのは謡の練習であるが，「アベさんとのツレの連吟も申分なくそろって」(1952年8月24日)[28]という最高潮から，「アベさ

んの小原御幸は相変わらず粗っぽくムラやミスのみ」(1962 年 8 月 17 日)[29] という苛立ちにまでまっすぐ落ちていく。

初恋の人中勘助との再会を果たし，勘助や豊一郎や能成より一学年上の一高理科の首席だった，つまり彌生子にとって理想的な最高の知性たる田辺元との相思相愛の付きあいをはじめる 1950 年代前半が「こうした男友達との交わり」のピークだったと言えよう。「今年は私にはいろいろな意味で記念さるべき年であった。ある特定の対象〔田辺〕とこれほど深い知的な，また愛情をもっての繋がりが出来ることを夢にも考えたろうか。私たちの年齢においてはわけてもこれは珍しいことといえる。それだけにたいせつに純粋に保たなければばらない」[30] と彌生子は 1953 年の大晦日の日記にしみじみと綴っている。

このような彌生子の高揚感とともに，能成の存在感も（ついでに，という感じなのだが）増してくる。「朝幾つかの手紙とともに安倍さんからも長い便りがとどく。〔中略〕最後におたがいいつまで生きるだろうか，と友情に充ちた言葉で珍しく長い手紙がとめてあった。T―氏〔田辺〕とはまたちがった意味において，私に彼がなくてはならないものであると等しく，いまの彼には私の存在をたのしい必要とするのである」(1954 年 9 月 7 日）[31]。

能成のアメリカ視察旅行の前の送別会の帰り，ぎゅうぎゅう詰めのタクシーに乗りこんだ時の振舞いには，未亡人からも夫の友人からも軽躁すら感じられる。「安倍の隣が私。彼の左手を背中から左の腰に感じた。下車する時，くらい車内で彼は黙って私の手をとった。私の[ママ]ちょっと強く握手を返し，くれぐれ気をつけて，といって別れた」(1952 年 10 月 30 日）[32]。

ところが 1950 年代の後半になると，前々から知っていたとはいえ，（彌生子から見た）能成の政治音痴や皇室好き，直言癖や独りよがりが次第に我慢できなくなってくる。中勘助に関しても，夫亡きあと自由に会えるよ

うになってかえって熱が冷めたようである。「相変わらず愛読者，銀の匙の話が出る。幸福な人かなとあわれむ思いで客観的に淡々と退屈をかんじつつ接する自らを私は一面おどろきで見る。この一箇の存在の為に半生以上を苦悩した事はなんと奇妙な夢であったろう」（1962年4月23日）[33]。そして田辺元は1960年に入ると病に倒れ，長い入院生活のすえ1962年4月末に亡くなった。彌生子と，三人の元・一高生たちとの交わりはこうして終わる。

1964年3月の「婦人公論事件」（と名付けたいのだが）以後は，2年後に能成が亡くなるまで，彌生子のなかにわだかまりが残ったように見える。1964年に彌生子の『秀吉と利休』が中央公論社主催の女流文学賞を受賞するが，そのさい能成が彌生子の古い友人として『婦人公論』に載せる原稿の執筆依頼を受けたのである。「出来たものは彼流の直言を取り[ママ]越した露悪と皮肉に充ちたもの」で，困惑した編集者が一部を削除してくれるように頼んだが，能成は頑として応じない。編集者は彌生子に，このボツにするしかない原稿を見せた。どれほど彌生子が不快がるか心配していたらしいが，彌生子は「彼に書かすればこんな事しか書かないのも予想された」と動じなかった。しかし怒りは収まらない。「能成よ。あなたの直言は，いかに毒づいても自分の損にはならない対象のみに浴びせかけれるのに，自分でもし気づいてないなら，あなたはこの上なしの愚ものであり，それを心得ての上ならなんとも狡い人間であることよ」（1964年3月24日）[34]。

これと同じような内容の記述が，およそ30年前の1936年にも存在している。彌生子のエッセイ集『秋風帖』の新聞書評を能成が書いたときである。「安倍能成氏が書いてくれた秋風帖の批評がやっと「朝日」に出た。大に賞賛してあるが，しかし同時に意地のわるい皮肉が浴びせてある。彼がそんな眼で私を見ている事はこの批評をよむまでもなく私には分かっているから別にびっくりもしない。ただ彼は偏見家で，全部を見通す目のない事

を改めて知ったのみだ。よい，頼もしい人だ。同時に意地わるい。頑固おやぢだ。最後の『交際ぎらいを標榜しつつ，必要な交際は欠がない云々』の文句にしゃくに障った。これは山の生活〔北軽井沢の法政大学村の別荘〕を見ての決論ママで，彼の家の批評らしい。私の周りにある社交で，私自ら求めた者は一つとしてないことを彼が知っているだろうか。〔中略〕殊に必要なところにはなかなかの社交家になれるのはむしろ安倍氏ではないだろうか」（1936 年 12 月 6 日）[35]。

能成と彌生子は実は互いに同じ部分を批判しあっている。つまり，内面は功利的で，なかなかの政治家，俗物で，「狡い」世間知にも長けているということである。能成は，彌生子が長く書きついできた『迷路』が完結したおりのパーティの挨拶でもこんなふうに彌生子を皮肉っている。「そうして安全な地位を保ちつつ，いわゆる進歩的な短い評論をぽつぽつとお出しになるところなどは，中々心憎い隅におけぬ婆さんです」。「〔私は〕野上さんなんかと違って，実に浅薄な，腹芸などは全くありませんから」[36]などと……。

『婦人公論』の原稿も，やや左寄りのヒューマニストたる彌生子（何しろ彌生子の葬儀の司会を務めたのは「北軽」の友人大江健三郎だった）の二重道徳的な振舞いを批判している。彌生子の日記を詳しく分析している稲垣信子は「「婦人公論」で安倍能成の原稿を預かったままなのか，返却したのか，当時のことを編集者に訊ねても想い出せないとのこと」[37]と書いているが，この未発表原稿は，能成の生まれ故郷松山市にある愛媛県生涯学習センターに保管されている。岩波書店特注原稿用紙の端っこに「婦人公論にたのまれてかいたもの（都合で載せなかった）」と書かれた，「野上やえ子さんと私」という題名のエッセイがそれである。冒頭から「会えばいつも憎まれ口をたたき合うが，第三者からは非常に親しい仲だと思われているらしい。どうもかわいいばあさんとはいいかねるし，すきな友だ

ちというのでもないが，それに拘わらず，親しい仲だとぐるりの人がいいたがる」[38] と攻撃的であるが，能成の本音と，二人が外からはどう見られていたかがよくわかる。

彌生子を最も怒らせたのは，次男茂吉郎にたいする批判であった。自分への非難はまあよいとしても，子どものことを言われては「なにか茂吉郎に対して私自身がすまな〔い〕思がする」[34]。

九州大学に勤めていた次男を東京に呼びよせるために，野上夫婦は能成に頼んで学習院大学に転勤させるが，すぐに東京大学（駒場）から声がかかると，彌生子は慌てて次男を学習院から去らせようとし，自ら能成に長い手紙を書いたことがあったのだ。能成はその話を蒸しかえしている。「当時すでに四十を越えて居た茂吉郎自身が言うべきことを，母親が代弁するから，私はそれも気に入らず」[38] ともある。かつて能成が法政大学から京城帝国大学へ移ったとき，憤慨した彌生子は「しかしこれ等の例に依って見ても日本の学者と云うものが如何に事大主義であるかが分かる。尤も[ママ]進んだ思想を有しているべき筈の人々さえ，何より有りがたいのはお上の力なのである」と書いたのに，自分の子どものことになると帝国大学の権威にひれ伏そうというのか。もっとも，手紙のなかでは「それもあなたが京城へ去ったというような事情とは，根本的に違った理由からの決意だということも，どうぞどうぞ汲みとってくださいまし」[39] などとも書いているのだが。それにしても，これは能成の転出騒動の皮肉な反復であろう。

能成の批判を引用しておこう。「野上家では，長男の素一君も，三男の燿三君も，一人はイタリア語をやって京都大学に居り，弟は化学をやって東大に居る。こういう旧帝国大学を，思想の自由と学問研究との安全を保証すると考える利口さを愛する気にはならない」。「ともかくも，やえ子さんはあれだけ創作に全力を傾倒しながら，そういうふうに子どもの安全な職業の●●〔判読困難〕の為には，十分奔走し，又自分で交際嫌いだとい

いながら，処世に抜目のある人ではない。交際すべき処とはちゃんと交際して遺漏はない」[38]。

4. 純粋のゆくえ

互いに悪口を言いあう能成と彌生子に共通しているのは，理想や純粋な心情，「本統の」芸術・学問にたいする憧れと尊敬であった。能成の一高校長時代にフランス語教師だった市原豊太（1902 ～ 90）が「〔安倍先生は〕心の美しい人が好きなんですよ」[40] と座談会で語っているのは，能成の憧憬の性質をよく捉えているだろう。同じく一高ドイツ語教師だった竹山道雄（1903 ～ 84）は「先生は動機の純粋についてやかましかった」[41] と振りかえる。彌生子のほうに目をやれば，彼女が田辺元とその「本統の」学問を尊敬し愛したのも，「あの人の真っ正直な純粋な態度」（1954 年 8 月 3 日）[42] のためである。

彌生子は田辺元と，彼の一高時代の思い出話をしたことをこんなふうに書いている。「藤村操のこと，彼の自殺時代に一高に醸しだされていた精神主義。それらは明治女学校〔彌生子の母校〕のクリスト教文化主義にも通じるし，話のあいだにも共通に名前を知っている人がたくさん出る有様で，彼も語るのがたのしく，聞くのもおもしろそうであった」（1951 年 9 月 25 日）[43]。

1903 年 5 月の一高生藤村操（1886 ～ 1903）の華厳の滝自殺を，エリート文化が教養主義的なものへと変化しつつあったことの一つの現われと見なすのはもはや定番であるが，われわれの登場人物たちはみな藤村操の亡霊とともに青春時代を送ったわけである。能成や豊一郎は藤村操の同級生であった（ちなみに能成は藤村操の妹と，田辺元は従妹と結婚した）。若き能成は一高校友会雑誌に載せた「藤村操君を憶う」のなかで，親友の純粋な哲学的自殺を称賛しつつ悼んだ。「げにこの詐り多き，浅薄なる，無

神経なる，形式に走りて皮相を事とせる，混濁の社会に交らんには，君は余りに真摯なりき。余りに清浄なりき。嗚呼君の死をはやめしものは，実に君が真摯にてありき」[44]。

能成と彌生子に見られる，こうした大正教養主義における，生き方そのものの純粋さを求めるありようが，1936年出版の『学生と教養』に明確にあらわれている。能成はここに,「学生に対する一般的助言」という論考を，彌生子は「一つの注文――遠くイタリアへ学ばんとするSへ」というエッセイを寄せているのである。最後にそれを見ていこう。

『学生と教養』は，以後1941年10月まで12巻にわたって出される学生叢書の最初の巻にあたる。しばしば指摘されるように，河合栄治郎（1891～1944）編集のこの学生叢書は1930年代後半からのいわゆるファシズム期における教養主義の復活を象徴するものであり，当時取り沙汰されていた学生の教養低下に歯止めをかける意図をもっていたが，そのマニュアル本的な造りがかえって教養低下を証明しているようにも現在では映ってしまう。

マルクス主義の華やかなりし頃にしばらく人気を落としていた安倍能成も，倉田百三（1891～1943）や阿部次郎といった大正教養主義のエースと並んでこの叢書でよみがえった。12巻中の8巻に寄稿しているので相当の出番率と言えよう。しかも，最初の巻である『学生と教養』の冒頭の論考を能成が書いたのである。そして最後を飾るのが，母親代表という触れこみの彌生子であった。河合栄治郎は序のなかで「先ず青年に与うる一般的助言として，安倍能成氏を煩わし，最後に青年に対する家庭よりの言葉として婦人の中に人を求めて，野上彌生子氏によって母としての注文を聞くことが出来た」[45] と書いている。

能成の文章は題名どおり「一般的助言」であり，青年はいかに生きるべきかという教養主義的な，しかし漠然とした問題が扱われている。彌生子

風に批判的に言えば，話がさまざまなところに飛んで少しまとまりに欠けているが，肝は次の部分にあると思われる。「諸君は道徳的にも美的にも知的にも，本物を志してゆくと共に，そういう本物を見分け聞き分ける心の眼，肉の眼，心の耳，肉の耳を養うことを心がく可きである。青年にして真実を何物にも超えて尊重することを知らざるものは，本質的に青年の資格を欠くといってよい。如何なる場合にも純真誠実は無条件に尊重せられてよい。〔中略〕道徳的行為なるものは意志の誠実を以てその本質とする。意志が誠実でさえあれば如何なる行為も是認せられるのではないが，この誠意のない時には如何なる行為も否認されねばならない。他の何物にも越えて自己の意志の誠実を重んずると共に，他人の裏にあるこの誠実を尊び，これを養い育てて損なわないようにすることが，世と人とを美しくする根本義である。よき宗教もよき学問もよき芸術もそこから生れて来る。しかしこれが天下第一の困難時であることも亦いうを須ない」[46]。

もう一つ注目したいのは，「私が諸君の年頃に非常に苦しんだ問題」として，「自分の天分の貧弱」が挙げられていることである[47]。高等教育（旧制高校）の場に放りこまれたとき，周りの天下の秀才たちのなかで自分の才能の欠如を思い知らされたということだが，これは学科の勉強の競争について言われているのではなく，上記の言葉を使えば「純真誠実」の度合いの問題である。「本物」の学問，「本物」の芸術に，どれだけ「純真誠実」にかかわることができるかという「天分」である。旧制高校生たちが俗物性を嫌悪したことを加味すれば，どれだけ脱俗しているか，どれだけ純粋かという男同士の競争と言ってもよい。

ただし，こうした若々しくも苦しい純粋をめぐる闘いのなかに，一種の虚栄を見る視点も，能成はもっている。一高の同級生（正確に言えば岩波が能成らの組に落第してきた）盟友岩波茂雄（1881 ～ 1946）の追悼文のなかで能成は，「岩波が自分の理想，例えば脱俗的ということには遠かった

に拘わらず，脱俗的だと思われようとする子供らしい虚栄心を有していたこと，それに触れると強く反撥したこと」[48] を懐かしく思いかえしている。

さて，野上彌生子の「一つの注文」のほうに移ろう。副題にある「遠くイタリアへ学ばんとするS」は長男の野上素一（1910～2001）で，戦後に京都大学文学部イタリア文学科の教授になっている。「一つの注文」は，すでに触れた彌生子のエッセイ集『秋風帖』(1937) にも収められているが，能成はおそらくこの文章を指してこう批評している。「知識ある女性としての聡明を披露しながら，母としての盲目的な愛の甘ったるさをも覗かして居ることを看過し難い。私の趣味としてはもう少し素朴な表現の裏に母としての賢さと心遣いとが見えるという，むしろ反対の表現の方が好きであるが，自分の好む所を以て妄に著者に強うるわけにも行くまい」[49]。

彌生子の文章は，河合栄治郎が期待したような「家庭よりの言葉」というには，あまりにも知性的であり，教養（と時に衒学）に充ちみちている。これだけの知識を誇示できる母親は滅多にいまい。それでいて，能成が指摘しているように，良家の母の優秀な息子にたいする細やかな心遣い（もっとも，彌生子にとって自慢の息子は次男と三男のほうだったらしいが），経済的余裕のあるブルジョア的母だけがもちうる特権的愛情が，微苦笑を起こさせるほどにあふれている。

とりわけ母を喜ばせているのは，息子が「欧州文化の淵源をなす」古典語を学び，そしていま本家本元のローマに行こうとしていることである。「そうしてまたこの度は思いがけない機会に恵まれてその文化の芽生え花咲いた土地，母なる狼の乳房に育ったロムニスとレームスの創めた国の土をあなたは頓て踏もうとしています」[50]。上っ面ではない「本統の」教養を求めることを母は願っているし，また息子がそうなるように母もともに努力してきたのではなかったか。

日本思想史研究者の苅部直は，「野上彌生子の「一つの注文」は，こう

した〔教養の…引用者〕純粋志向の，ある極点を示してもいる」[51] と言う。まさしくその通りなのであるが，さらに苅部は息子Ｓにたいする心配を表明してもいる。能成の「非常に苦しんだ問題」としてわれわれも見たように，エリート学生たちは「おたがいの視線を強く意識しながら俗世間から独立して「教養」を求める」[52]，若い男同士の闘いという閉鎖空間におかれていたから，女性や家庭はそこからの避難場所ではなかったかと苅部は見るのである。「ここでは，近代日本の「教養」が前提とした男性たちの交流世界から，疎外されているはずの女性が，男性知識人をこえるほどの熱意をもって，「教養」の純粋な追求を迫っている。おたがいの視線を意識しながら努力しあう，学友どうしの競争からぬけだし，息抜きする場を，家庭内に求められない息子の心境は，一面では窮屈なものだったのではないか」[52]。

苅部はこうして野上素一京大教授の著作にまつわる盗作事件を引きあいに出す。「近代日本の「教養」が含んでいた純粋志向を，類のない苛烈さをもって体験した人物〔野上素一〕の心に刻まれた，深い屈託がうかがえるようである」[52]。

1975 年 6 月 21 日の読売新聞夕刊三面記事トップが伝えたこの盗作事件が，母親の「本統の」学問志向と関係があるかどうかは俄かに判断できないが，彌生子の日記のなかには事件についての言及はない。朝日新聞がこの騒動を無視したことと，朝日岩波文化人の代表的存在である母親との関係は多少取り沙汰された。あるいは，彌生子のほうが大衆的な読売新聞なぞ無視していたのかもしれない。

彌生子はまだ若い作家だったころ，こんな日記の記述を残している。「とり分けうれしかったのは，京都の西田〔幾多郎〕博士が私のものを愛読していられるという報告があった。これは和辻さんに伝わり，小宮〔豊隆〕さんが先日京都に行ったとき和辻さんから聞いて来られたのである。斯ん

な読者を一人もつことは，他の下らない読者を千人もつより名誉であり，愉快である」（1925年9月15日）[53]。

たしかに彌生子はエリート男性的な教養がもつ「純粋志向」の権化だった。彌生子に少し軽く見られていた能成だけが，そうした「純粋志向」にまつわる男同士の闘いにも，そしてそこから必然的に生ずる虚栄の相互暴露の闘いにも，彌生子を引きこんだのである。この能成の，男女を超えた「友情」に彌生子が気づいていたかどうかはわからない。

註

1）野上彌生子，「漱石先生の思い出」，『野上彌生子全集』（以下『全集』とする）第22巻，岩波書店，1982年，389～390頁参照。（初出『中央公論』第81巻第5号1966）

2）『野上彌生子全集第Ⅱ期』（以下『第Ⅱ期』とする）第1巻，1986年，36頁。なお，引用に際して旧仮名遣い・旧漢字を新仮名遣い・新漢字に改めたが，以下も同様である。

3）1971年10月27日の日記参照。『第Ⅱ期』第17巻，1990年，421頁。

4）野上，「寺田さんのこと」，『全集』第19巻，1981年，94頁。（初出『思想』第166号1936）

5）野上，「安倍さんのことさまざま」，『全集』第22巻，408～409頁参照。（初出『世界』第249号1966）

6）和辻哲郎，『偶像再興』，岩波書店，1919年，巻頭頁。

7）紅野敏郎，「安倍能成・阿部次郎　宿南昌吉『宿南昌吉遺稿』」，『遺稿集連鎖――近代文学側面誌』，雄松堂出版，2002年，44頁。

8）竹内洋，『教養派知識人の運命;阿部次郎とその時代』，筑摩書房，2018年，325頁。

9）野上，『第Ⅱ期』第1巻，121頁。

10）野上，『第Ⅱ期』第1巻，126頁。

11）野上，『第Ⅱ期』第4巻，1987年，589頁。

12）野上，『第Ⅱ期』第13巻，1988年，422頁。

13）野上，『第Ⅱ期』第 13 巻，359 頁。

14）野上，『第Ⅱ期』第 12 巻，1988 年，38 頁。

15）田村道美，「野上弥生子と中勘助（一）」，『香川大学教育学部研究報告　第一部』，102 号，1997 年，21 ～ 25 頁参照。

16）野上，『第Ⅱ期』第 15 巻，1989 年，392 頁。

17）野上，『第Ⅱ期』第 4 巻，481 頁。

18）富岡多恵子，『中勘助の恋』，創元社，1993 年，354 頁。

19）岩橋邦枝，『評伝 野上彌生子：迷路を抜けて森へ』，新潮社，2011 年，51 ～ 52 頁。

20）同上，22 頁。

21）豊一郎の死の二週間ほどあとの日記にはこうある（1950 年 3 月 14 日）。「とにかく彼の死はある意味で彼が長年私に与えなかった解放であるが，それが斯くまでに完全になされ〔た〕ことは私以外には誰も感じえないものである」。『第Ⅱ期』第 10 巻，1988 年，321 頁。

22）野上，『第Ⅱ期』第 11 巻，1988 年，127 頁。

23）野上，「安倍能成宛書簡」（1952 年 1 月 2 日），『第Ⅱ期』第 25 巻，1991 年，268 頁。

24）同上，267 頁。

25）青木一平，「野上彌生子と安倍能成――漱石門下生の交遊」，筑波大学日本史談話会 編『日本史学集録 』，第 41 号，2020 年，54 頁。ところで，註 15）で触れた田村道美の論文の追記には次のようにある。「本稿脱稿後，そのコピーを宇田健氏にお送りしたところ，北軽井沢の野上山荘に弥生子宛書簡が千七百通ほど保存されており，その中に昭和二十七年一月三日付の安倍能成の書簡があり，「中が結婚しなかつたのはこの姉の為です。決してあなたの為でハない，これハ私が断言します。」という一文が含まれていることをご教示下さった」。文面から見てこの書簡が古書市に流れたと思われる。田村，前掲論文，25 頁。

26）野上，『第Ⅱ期』第 11 巻，196 頁。

27）追悼文の「安倍さんのことさまざま」にも，「この安倍さんに対して，私が平気で憎まれ口をきくようになったのはなんという変化だろう。これは野

上が亡くなったあと，その代理のようになって安倍さんとの接触があらたにされた以来のことで」とある。『全集』第22巻，410頁。

28）野上，『第Ⅱ期』第11巻，304頁。

29）野上，『第Ⅱ期』第14巻，1989年，262頁。

30）野上，『第Ⅱ期』第11巻，562頁。

31）野上，『第Ⅱ期』第12巻，1988年，141頁。

32）野上，『第Ⅱ期』第11巻，324頁。

33）野上，『第Ⅱ期』第14巻，205頁。

34）野上，『第Ⅱ期』第14巻，515～516頁。

35）野上，『第Ⅱ期』第5巻，1987年，479頁。

36）安倍，「「迷路」の会の記」，『涓涓集』，岩波書店，1967年，35頁。（初出『世界』1957年5月号）

37）稲垣信子，『「野上彌生子日記」を読む　完結編　中』，明治書院，2008年，11頁。

38）安倍，「野上やえ子さんと私」，愛媛県生涯教育センター所蔵。

39）野上，「安倍能成・恭子宛書簡」（1952年4月14日），『第Ⅱ期』第25巻，281頁。

40）竹山道雄・鈴木成高・市原豊太・林健太郎・唐木順三，「座談会　大正昭和の文化人」，『心』第24巻第2号，1971年，37頁。なお，ここで「心の美しい人」とは寺田寅彦を指している。

41）竹山道雄，「安倍能成先生のこと」，『竹山道雄著作集4』，福武書店，1983年，203頁。（初出『ももんが』1981年12月号）

42）野上，『第Ⅱ期』第12巻，108頁。

43）野上，『第Ⅱ期』第11巻，139頁。

44）安倍，「藤村操君を憶う」，『校友会雑誌』，128号，1903年6月15日，71頁。

45）河合栄治郎，「序」，河合栄治郎編，『学生と教養』，日本評論社，1939年（第20版），3頁。

46）安倍，「学生に対する一般的助言」，『学生と教養』，30頁。

47）同上，27頁。

48）安倍，「岩波と私」，『一日本人として』，白日書房，1948年，210頁。（初出

『世界』1946 年 6 月号）

49）安倍,「野上彌生子氏著『秋風帖』」,『朝暮抄』，岩波書店，1938 年，236 頁。（初出『東京朝日新聞』1937 年 12 月 6 日号）

50）野上彌生子,「一つの注文――遠くイタリアへ学ばんとする S へ」,『学生と教養』，445 頁。

51）苅部直,『移りゆく教養』，NTT 出版，2007 年，54 頁。

52）同上，61 ～ 62 頁。

53）野上,『第Ⅱ期』第 1 巻，305 頁。

（本研究は JSPS 科研費 JP22K00498 の助成を受けたものである。）

The Struggle for Genuineness: Abe Nosei and Nogami Yaeko

TAKADA Rieko

This paper is an attempt to analyze one of the important features of Taisho Culturalism, namely its "genuineness orientation," based on the biographical facts of the philosopher Abe Nosei (1883-1966) and the novelist Nogami Yaeko (1885-1985). Yaeko's diary and letters published posthumously, as well as Nosei's unpublished manuscripts, are the main objects of my analysis.

As is well known in the literary research community on Yaeko, the young Yaeko confessed her love for Naka Kansuke (1885-1965), so famous for his novel "Gin No Saji", only to have her heart broken. Nosei, Naka's close friend, played the role of messenger to convey Naka's rejection. My article also tries to reconstruct the relationship between Yaeko and Nosei regarding this lost love incident as a comedy from a new angle.

Nosei and Yaeko, both known as disciples of Natsume Soseki (1867-1916) and leading writers of Taisho Culturalism, had been "friends" since their twenties. At the same time, they were sharply critical of each other.

To Yaeoko, Nosei's scholarship lacked intellectual genuineness. In Yaeoko's eyes, he was not a genuine scholar. To Nosei, Yaeko lacked genuineness of sprit. She seemed to behave in a calculated or diplomatic manner.

Their cheerful public bickering was seen as a kind of joke, expressing a rare "friendship" between the sexes. However, their criticisms of each other were veracious, and they were not joking. Their mutual criticism

shows their admiration for genuine artists and their respect for purity of heart. They both longed for what they knew they lacked. It is precisely in this intense longing that we see the essence of Taisho Culturalism.